

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念
令和5年1月例会

第I部 世界の医学(1): 古代から近世まで

—東西を繋ぐイスラーム世界の医学—

矢口 直英

[以下は第一部執筆者代表として語った際の内容に手直しを加えたものである。括弧内には項目執筆者を挙げる(敬称略)が、多数の項目を担当した執筆者が多いため、細かく分類することはできなかった。]

第一部は「世界の医学(1): 古代から近世まで」という題で、18世紀以前の西洋伝統医学とそれ以外の伝統医学を扱っている。全部で72項目あり、その半分以上はヨーロッパ(澤井直、坂井建雄)が中心であって、古代(池田黎太郎、福島正幸)、中世(今井正浩、堀忠)、近世(加藤公太、遠藤花子、森岡恭彦、菊地原洋平、安西なつめ、平尾真智子、柳澤波香、佐藤裕、西巻明彦、小林晶)と長い時代にわたっている。これら以外に、インド(山下勤)、アラビア(矢口直英)、中国・韓国・ベトナム(小曾戸洋、真柳誠)と、既存の医学の通史ではあまり触れられない地域の記述を、また幾つかのテーマについては通史的記述(猪飼祥夫、園田真也、川満富裕、小清水敏昌、水谷惟紗久)を含む。ページ制限の都合から記述が十分ではないだろうが、これらの地域における医学の歴史のよい参考資料になったであろう。

報告者は執筆者として6項目を担当した。そのうちの一つ「イスラーム世界の医学」という項目名には、この分野ならではの厄介な事情がある。この分野は「イスラーム医学」や「アラビア医学」とも言われるが、ともにその実態を正しく表していない。まず、この分野で活躍した人物の全てがムスリムというわけではない。7世紀初めのイスラーム勃興の後、ムスリムの医者割合がキリスト教徒やユダヤ教徒に勝るのは11世紀になる。ま

た彼らが研究し実践した医学はいわゆるガレノス医学で、イスラームとは直接の関係がない。後の時代には「預言者の医学」、つまり預言者ムハンマド(など)による生前の言行録に基づく、信仰と結びついた医療体系が登場する。しかし、これが支配的になったわけではなく、イスラームの医学という呼称は不正確である。

また、この分野で活躍した人々は民族の面でも一様ではなく、多くがアラブ以外のルーツをもつ。イスラーム世界では共通語としてアラビア語が用いられたが、初期からシリア語の書物が流通し、後にペルシア語、トルコ語、ヘブライ語で書かれた医学文献が登場する。地名としてもアラビア半島を越えた広大な領域が扱われるため、アラビア医学という言葉も適切とはいえない。

イスラーム世界が宗教や民族に関して寛容で多様な社会であったために、このような状況になった。この寛容性と多様性はイスラーム世界における医学の発展に有利に働いた。キリスト教が国教化したビザンツ帝国領域で研究と教育への抵抗を受け、医学は哲学と共に東方へ運ばれた。その結果、イスラーム勃興前の中東にはギリシア医学や哲学が広まる。ここに登場したムスリムたちは周囲の先進文明の学問を取り入れ、ガレノス医学と出会い、9世紀の中頃に医学文献を大規模に翻訳することになる。

この翻訳運動で活躍したのも主にキリスト教徒であった。イスラーム世界で活動した学者や知識人は、ここで導入されたガレノス医学を基礎として発展を生み出した。彼らが積み上げた成果は同時代のヨーロッパより進んでおり、今度は逆にム

スリムからヨーロッパ人たちが学ぶことになる。この過程でラテン語に翻訳されたアラビア語の医学書は、大学医学部や医学校の教科書として採用され、近代以前のヨーロッパにおける医学教育に影響を与えた。ガレノス医学が重視され続け、それが否定されて近代医学が始まることはよく知られた通りである。

ところで、主にキリスト教徒が中心的な役割を果たしたため、イスラーム世界の医学ではガレノス医学の影響が圧倒的であり、近隣の先進文明であるイランやエジプトの医学伝統はイスラーム世界に目立った痕跡を残しておらず、少し離れた中国やインドもどれほど影響を与えたのかは十分に

明らかになっていない。本書でもこれらにあまりページを割けておらず、今後研究が盛んになっていくことを期待したい。実際にはイスラーム世界で生まれた文献の大部分が写本の状態のまま眠っているため、イスラーム世界の医学も十分に研究が進んでいるとは言えないのではあるが、

中世イスラーム世界の医学は極東を除くユーラシアの医学伝統を地理的にも時間的にも繋ぐ位置にある。本書第一部の記事は、古代から中世そして近世へ、それらの変遷が分かるようになっている。人間が病気との闘いで積み重ねた努力の歴史として、本書が興味を持たれ広く読まれることを願う。